

回復期リハビリ病棟におけるリハビリスタッフによる退院に向けての説明の取り組み

藤田真介¹⁾ 風晴俊之¹⁾ 美原盤²⁾

1) 脳血管研究所美原記念病院 リハビリテーション科

2) 脳血管研究所美原記念病院 神経内科

[はじめに]介護を未経験の患者・家族にとって、退院後の障害を抱えての生活、そしてその介護をイメージするのは容易ではなく、自宅退院に対する不安は大きい。リハビリスタッフは退院後の生活・目標について説明する機会があるが、若手スタッフも多い中、適切な予後予測のもと明確な将来生活像を伝えることができるかは大きな課題である。そこで当院では、「分りやすい説明」「説明の標準化」を目的に、当院リハビリ科のデータベースをもとに作成した予後予測表、および退院時の歩行像や在宅サービスなどを撮影し、説明の際に用いている。今回、その取り組みに対するリハビリスタッフの意識調査を行なったので報告する。

[対象・方法]対象は平成 28 年に回復期リハビリ病棟に従事した 2 年目以上の一般職のリハビリスタッフで、産休・育休を除く 34 名とした。方法はアンケート法を用い、①予後予測が設定しやすくなったか、②患者・家族からの理解が得られやすくなったと感じるか、③説明がしやすくなったか、④病状説明に要する時間が変化したか、について 5 択式で聴取した。

[結果]①予後予測は 44%が設定しやすくなったと回答した。②74%が、理解が得られやすくなったと感じており、③79%が説明しやすくなったと回答した。④病状説明の時間は、47%が長くなったと回答した。

[考察]予後予測はスタッフ個々の経験則から判断することも多く、若手スタッフが正確な予後予測を立てることは難しい。客観的なデータに基づく予後予測や退院後の生活を視覚化することで、患者・家族のみならず、リハビリスタッフにとってもイメージしやすく、転帰先の検討がしやすくなると思われる。一方、具体的な説明になることにより説明に時間を要し、業務を圧迫する可能性もある。リハビリ診療報酬は時間によって定められており、このような取り組みが訓練時間に影響を与えないようコントロールしていくことが課題である。